

101 モーイ親方（レ）

（マブイの恩返し）

昔ですね、モーイ親方という人がおったそうですがね。この人は、昼は馬鹿げたようなことをして、みなから軽蔑されてですね、勉強もしないで怠け者みたいにおったそうですが、夜はまたその代わり、暗いところで、線香の灯火で勉強をしたような人物らしいですね。

ある日、晩に墓場を通つてみると、ある一つの墓の中で明かりをつけて何かそこそとしているような、人の気配がしたものですから、

「実は私はモーイという者だが、君はこの世の者か、またはあの世の者か」と尋ねたところが、

「私は実はこの世の者であります。こういうことをするのもお恥ずかしい話だが、お金があればこういうことをしないけれども、金がないために自分一人で、自分の夫の洗骨をしております。理由は、これを昼行なうということになると、親戚、知人、友人が来ますの

でお供え物も買わんといかんし、いろいろお金がかかるので、自分はもうこういうふうにして一人で夫の洗骨をやっております」というもんですから、

「それじゃ、一人じゃ大儀だろう、私も加勢してやろう」と言うて、お手伝いをして、洗骨をきれいにやつて、納めてきたらしいですね。そうすると、このモーイ親方が夜になると、足下のほうを灯火が付いて、暗い所でも明るくしてくれたらしいですね。

そういうおるうちに、お父さんが、公儀くぎというと今の県庁ですね。公儀から難問を言い付けられてですね。この難問の種に、非常に心配して、どうしたらこの難問を越すことができるかなあと思つて苦労するけれども、これは人間の力では出来るものじゃないというて心配しておられるのを、モーイが見て、忍ばれないで、

「お父さん、何の心配かわからないけれども、私が出来るかできんかもわからんが、まずひとつ幼い子どもであつても、何かそこにいるのがあるかもわからんから、お話していただませんか。私ができることならお力になつてあげますから」と言うたところが、お父

さんも、子どもがせつかく言うてくれるんだから、まあ一口ぐらいそれじゃ話しておこう、というて話したのが、今日では那覇から名護まで自動車で二時間ちよつとで片道行きますけれども、昔は、首里から山原までというて、三、四日はかかったらしいですね。そうだが、公儀からの注文は、明日じゅうにこの政治事を是非向こうに持つて行つて、解決をみてくれという命令が下つたもんですから、これ、人間業じゃ出来ないというところで、苦労しておつたわけですよ。その訳を話したところが、

「そうですね、それならしばらく待つて下さい」と言うて、そのモーイはお墓の前に行つて、

「実はこういうふうにかじかきのことで、お父さんが心配しておられるから、あんたの力で出来ることならひとつ協力してくれんか」と言うて、お墓の前で手を合わせてお願いしたところが、

「それじゃたやすいことです。私がお父さんを山原やんばるに明日じゅうにお供して用事を済まして、またお連れして参ります」というて、言うたらしいです。それをお父さんに話したところが、

「そんなことがあるもんか」と言うておつたが、案の定、死んだ人の魂がこの人を山原までお迎えして行つて、その用事も無事終えて帰還してきたという、こういうお話がありますかね。

字照屋 上江洲由豊